



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	死と対峙するとき：『源氏物語』致仕の大臣の柏木哀悼をめぐって(fulltext)
Author(s)	吉井, 奈津美
Citation	学芸古典文学(11): 44-52
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/150053
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

死と対峙するとき

— 『源氏物語』 致仕の大臣の柏木哀悼をめぐる —

吉井 奈津美

一、はじめに

多くの死が描かれている『源氏物語』の中で人々はどのような死に向かい合っていたのだろうか。桐壺帝は、桐壺更衣の死後、遺児である光源氏を愛育しながら、桐壺更衣に似ていると噂のあった先帝の四の宮（藤壺）を妻として迎え入れることとなった。このように、身近な者の死に際して、その遺児であったり、容姿などが似ている者を代わりとして側に置いたりということが『源氏物語』中では多く見られる（注1）。死者の遺した言葉、すなわち遺言が残された者たちの心の拠りどころとなることもある（注2）。では、形見となる遺児や、容姿などが似て代わりとなるような人物、亡くなった人物から残された遺言がない者はどうであるのか。例えば、柏木巻で息子である柏木を亡くした致仕の大臣である。実の父である致仕の大臣への遺言は物語中に直接見ることもできないし、致仕の大臣の口から柏木の遺言について語られることもない。また、柏木には表向きは子もいないことになっており、形見として遺児を育てることもできない。

本稿では、柏木死後の致仕の大臣に焦点をあて、形見となる人

物もおらず、遺言も残されていない中で、致仕の大臣がどのように柏木を哀悼しているのかについて見ていきたい。

二、生前の柏木に求められたもの

致仕の大臣と正妻である四の君の間に生まれた長男の柏木は、権勢家である致仕の大臣家の後を継ぐものとして期待されていたはずである。若菜下巻において冷泉帝の血筋が絶え今上帝に譲位されると（若菜下④一六四）、今上帝とかつてから親交のあった柏木は、「今の御世にはいと親しく思われて、いと時の人なり」（同二一七）と述べられるように、帝から厚遇される立場となった。

この時勢の移りは、致仕の大臣にとつて息子柏木の出世が望めるまたとない機会であった。しかしその一方で、朱雀院の娘であり、光源氏に降嫁することとなった女三の宮に心を奪われてしまったことで、柏木はあつという間に転落していった。女三の宮との許されざる繋がり、それを光源氏に知られてしまったことへの恐れ。

彼はそうした重圧に耐えきれず、どんどん衰弱していった。致仕の大臣は、息子がなぜこんなにも急に衰弱してしまったのか理由

も分ならず、「かしこき行者」を「葛城山」から呼び寄せて、ひたすら加持をさせ回復を願うしかなかった（柏木二九三）。

柏木の死の直前、彼は帝から「権大納言」の位を授かる。柏木の昇進に対する致仕の大臣の思いが描かれている部分を引用する。

おほやけも惜しみ口惜しがらせたまふ。かく、限りと聞こしめして、①にはかに権大納言になさせたまへり。よろこびに思ひおこして、いま一たびも参りたまふやうもやあると思しのためはせけれど、さらにえたためらひやりたまはで、苦しき中にもかしこまり申したまふ。大臣も、②かく重き御おぼえを見たまふにつけても、いよいよ悲しうあたらしと思しまだふ。

（柏木④三一一）

今上帝は、柏木の死が目前にまで迫ってきていることを知り、彼に「権大納言」の位（正三位）を授けることとなった（①）。今まで柏木が中納言（従三位）であった（若菜下④二一七）ことから考えると、大臣につぐ大納言の位を得たことは大きな躍進と言えるのではないだろうか。「権大納言」の「権」とは、定員外の役職を表わす接頭語である。もともと大納言職は、定員が二名と決まっていたようで、そのうち一人は夕霧であることが語られている（注3）。柏木は、今や夕霧と並びたつ位にまで昇りつめたのである。今上帝は、柏木に位を与えることでその喜びで元気になり、今一度彼が参内してくれることを望んでいた。しかし、彼の病状は思ったよりも重く、参内すらかなわないのであった。

致仕の大臣は、こうした帝からの柏木への厚遇を見るにつけても、ますます悲しく残念に思う。こうした致仕大臣の悲しみは、「か

く重き御おぼえを見たまふにつけても」②」という一節からうかがえるように、柏木という一人の息子が死ぬことに対する悲しみだけでは説明できまい。では、そこに介在する他の要素とは何か。右の引用の直前の部分を見てみたい。

はじめより、母御息所はをさをさ心ゆきたまはざりしを、この大臣のゐたちねむごろに聞こえたまひて、心ざし深かりしに負けたまひて、院にも、いかがはせむと思しゆるしけるを、二品の宮の御事思ほし乱れけるついでに、「なかなか、この宮は、行く先うしろやすく、まめやかなる後見まうけたまへり」とのたまはずと聞きたまひしを、かたじけなう思ひ出づ。

（柏木④三一一）

右の引用では、柏木が妻である落葉の宮と結婚するに至った経緯について書かれている。落葉の宮の母一条御息所は、始めから結婚に対して否定的な意見を持っていたが、柏木の父である致仕の大臣が熱心に働きかけ、それを朱雀院がお許しになったため結婚に至ったというのである。致仕の大臣は、なぜ熱心に落葉の宮と柏木との婚儀を進めようとしたのであろうか。次の部分にも注目したい。

衛門督の御あづかりの宮なむ、その月には参りたまひける。太政大臣あたちて、いかめしく、こまかに、ものきよら、儀式を尽くしたまへりけり。督の君も、そのついでにぞ、思ひ起こして出でたまひける。

（若菜下④二六六）

これは、致仕の大臣（「太政大臣」）が、落葉の宮を立てて柏木とともに盛大な朱雀院五十賀を催したことが述べられている部分である。ここで致仕の大臣は、柏木と落葉の宮との繋がりを世に知らしめるように盛大な朱雀院五十賀の儀式を執り行なっていた。致仕の大臣にとって、落葉の宮とはどのような存在なのだろうか。

加藤昌嘉氏は、若菜下巻においては《落葉宮十致仕大臣による朱雀院五十賀》の一方で《女三の宮十光源氏による朱雀院五十賀》も行われているが、柏木の発病などによって《女三の宮十光源氏による朱雀院五十賀》は小規模にならざるを得なかったという事情を指摘し、「若菜下巻に於いて、《落葉宮十致仕大臣による朱雀院五十賀》は、《女三の宮十光源氏による朱雀院五十賀》を上回る盛儀として実現されたわけである。致仕大臣にとって、落葉宮という存在者は、光源氏勢力に一籌を輪さしめ得る強力な持ち駒であった、といえる」と述べる（注4）。つまり、致仕の大臣にとって柏木と落葉の宮の婚儀の成立は、光源氏勢力に対抗する一手段として講じられたものだったのである。致仕の大臣にとって、息子柏木はかけがえのない息子であると同時に、今上帝との繋がり、落葉の宮との婚儀を通して致仕の大臣家の権力を拡大するために大切な人物の一人であったことは間違いない。この場面において描かれる致仕の大臣の悲しみは、息子そのものに対してだけでなく、権力を拡大し家が繁栄する夢が潰れてしまうことへの悲しみも含まれている。

そうした致仕の大臣の悲しみをよそに、柏木の容態は悪化の一途をたどる。そんな中柏木の昇進の噂を聞いて、長年親しくしている友人である夕霧が訪ねてくる。柏木は夕霧を枕元へ通して、これが最期の対面とばかりに思いの丈を夕霧に伝える。

「おほかたの嘆きをばさるものにて、また心の中に思ひたまへ乱るることのはべるを、かかるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にかは愁へはべらむ。①これかれあまたものすれど、さまざまなることにて、さらに、かすめはべらむもあいなしかし。②六条院にいささかなる事の違ひ目ありて、月ごろ、心の中に、かしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに」

（柏木④三一五）

柏木は、女三の宮との密通の件について「六条院にいささかなる事の違ひ目」②が あった というように、それとなく夕霧に伝える。そしてこのことは、兄弟など身内はたくさんいるが彼らには言えないことだとしている①。柏木は、女三の宮との密通という秘事を自分の心の内に留めておくことは出来なかった。しかし、その事実を身内に伝えることはできない。最終的に、柏木が事実を伝える人物として選んだのが、「六条院」つまり光源氏の息子であり、長年親交があった夕霧であった。それは、次のことを夕霧に頼むためでもあった。

（論者注…柏木は）「さるべきついでにはべらむをりには、御用意加へたまへとて、聞こえおくになむ。一条にもものしたまふ宮、事にふれてとぶらひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはむを、つくろひたまへ」などのたまふ。

（同三一七）

柏木は、夕霧に光源氏との一件について漏らさないでほしいと制する。その上で、この件についての源氏へのとりなし、そして自身が死んだ後に未亡人となる妻落葉の宮への見舞い、落葉の宮のことで気落ちさせてしまうだろう朱雀院へのとりなしの三点を夕霧に頼むのである。これこそが柏木の最期の言葉、つまり遺言となってしまう。『源氏物語』において遺言が友人に託される例は、夕霧と柏木の場合を除いて見られない（注5）。女三の宮との密通という秘事を抱えて亡くなっていくという特殊な状況下だからこそ、身内へ遺言を託すことができなかった柏木の姿が見える。

この夕霧との対面の後、柏木は「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」（同三二八）と、その短い生涯の幕を閉じる。その後の部分では、落葉の宮、一条御息所、致仕の大臣・北の方、そして女三の宮の嘆きが語られる。しかし、この中で柏木が亡くなったこととそのものを嘆き悲しむ人物は、父である致仕の大臣と母北の方だけなのであった。

三、柏木の死、致仕の大臣の癒えることのない悲しみ

泡が消えるように儂く亡くなっていった柏木。「あはれ、衛門督」といふ言ぐさ、何ごとにつけても言はぬ人なし」（柏木④三四〇）という一文からもうかがえるように、時勢にのつていた柏木は多くの人々から慕われていたようである。が、そうした人々にもまして悲しみに暮れているのは、やはり柏木の父である致仕の大臣と母北の方である。

大臣、北の方などは、まして言はむ方なく、我こそ先立ため、世のことわりなうつらいことと焦がれたまへど何のかひなし。

（柏木④三一九）

父大臣、母北の方は、涙のいとまなく思し沈みて、はかなく過ぐる日数をも知りたまはず、御わざの法服、御装束、何くれのいそぎをも、君たち御方々とりどりになむせさせたまふ。七日七日の御誦経などを、人の聞こえおどろかすにも、「我にな聞かせそ。かくいみじと思ひまどふに、なかなか道妨げにもこそ」とて、亡きやうに思しほれたり。

（同三二七）

右の引用は、どちらも柏木を失った悲しみに暮れる致仕の大臣と北の方の様子が描かれている場面である。一つめの引用では、自分たちのほうが先に死にたかった、この世の道理もなくつらいことと思うけれども焦がれても甲斐がないと、息子の死に直面して何も出来ないでいる様子がうかがえる。二つ目の引用からも、涙が次々と流れてきて意気消沈し、日にちの感覚もなくなってしまうていて、また法要の準備なども手がつかず代わりに子息たちが執り行なう様子が描かれており、息子の死に直面してうろたえる二人の様子が見て取れる。

また致仕の大臣が、次のようなことを言っている場面がある。

父大臣のさばかり世にいみじく思ひほれたまて、子と名のり出でくる人だになきこと、形見に見るばかりのなごりをだにとどめよかしと泣き焦がれたまふに聞かせたてまつらざらむ罪得がましき、など思ふも、

（横笛④三六五）

右の引用は、致仕の大臣がせめて形見に見る遺児だけでもいらと泣いて恋焦がれているということが、夕霧の回想から分かる場面である。直接的な致仕の大臣の描写ではないが、致仕の大臣が柏木の遺児がいたらと考えていたことをうかがわせる一場面である。この他にも、光源氏が、致仕の大臣や北の方が柏木の遺児を求めているだろうと憶測する場面（柏木④三二四）なども見られ、親が子を失ったときによく見られる考え方だと推測される。

柏木は、実際には女三の宮との間に男の子を一人もうけている。しかし、後に薫と呼ばれるその子は、作中人物たちの認識からすれば女三の宮と光源氏の間生まれの子だとされている。光源氏は薫が柏木の子であるという真実を認識しており、「この若君を、御心ひとつには形見と見なしたまへど、人の思ひよらぬことなれば、いとかひなし」（同三四一）と思っている。一方で致仕の大臣や北の方は、この真実を知る由もないのである。柏木が女三の宮と密通を犯し一子をもうけているなど、誰が想像できようか。

思い返してみれば、致仕の大臣はかつて同腹の姉である葵の上を亡くしていたのであった。そしてその葵の上もまた柏木と同じく、若くして親を残して亡くなっていた。「源氏物語」において子の死を嘆く親の例は、桐壺更衣の母、葵の上の父母、柏木の父、浮舟の母の四例しかない（注6）。ここからは、少し迂回となるかもしれないが親を残して死んだという共通点のある葵の上の死について見てみたい。それにしても致仕の大臣に関わる人物が二人も親を残して亡くなっているということからは、致仕の大臣家（もともと左大臣家）の悲運が見えてくるように思われる。親を残して死んだという共通点を持つ葵の上の死と柏木の死には、一つ

決定的に違うところがある。それは、葵の上と光源氏の間には夕霧という子が生まれていたということである。

若君を見たてまつりたまふにも、「なにに忍ぶの」と、いとど露げけれど、かかるかたみさへなからましかば、とおぼし慰む。
（葵②四九）

右は、光源氏が葵の上の遺児である夕霧を見ている場面だが、形見の子である夕霧がいることよって葵の上を失った悲しみが慰められることを述べている。「かかるかたみさへなからましかば」（傍線部）とあるように、形見の子を見るたびに涙は出てくるが形見の子がいなければ慰める手立てすらないのである。形見の子がいることよって、慰められている光源氏の姿が見えよう。また、形見の子がいることは心の慰めというだけでなく、人と人との繋がりを作り出す。葵の上の死によつて左大臣家と光源氏との繋がりが潰えてしまうかのように思われたが、遺児である夕霧がいることよつて「思し棄つまじき人もとりたまへれば、さりともものついでには立ち寄せたまはじやなど慰めはべる」（同六三）と、光源氏が左大臣家に立ち寄るときもあるだろうと自身を慰めていることが分かる。この部分からは、光源氏が家に立ち寄ることを望んでいる左大臣の姿が見えるが、これはどうか。

葵の上は、その登場から多分に「政治性」を帯びていた。吉井美弥子氏は、葵の上の死の日程が除目という政治に大いに関わることに設定されていることや、葵の上の登場が左大臣家と光源氏との繋がりを作りだすために要請されている点から、葵の上の「政

治性」を述べる（注7）。左大臣にとつて葵の上の死への悲しみは、単純に一人の娘を失ったことに対してではなく、政治の問題も絡みつつ左大臣家のこれからを思つての嘆きなのである。しかし結果的に葵の上亡き後、その役目は形見の子である夕霧に受け継がれる。左大臣家は、夕霧という遺児によつて光源氏との繋がり辛うじて留めることに成功し、葵の上の母である大宮が夕霧を育てることによつて左大臣家の傘下に組み込んでいたのである。

少し長くなつたが、ここで少しまとめてみたい。葵の上も柏木もともに親を残して亡くなつていったという共通点をもつていた。さらに付け加えるならば、葵の上も柏木もともに生前は家を背負い、大いに政治的な役割を担わされる存在であつた。葵の上には光源氏との間に遺児となる夕霧という子がいた。その子は、葵の上死後、葵の上の形見として源氏や葵の上の父母の慰めになるとともに、葵の上が担つていた政治的な役割を引き受ける存在となつた。一方で柏木は女三の宮と密通した結果、薫という遺児をもつたが、その子は世間では光源氏の子として育てられることになつた。不義密通が世間に露呈するなどあつてはならないことで、当然の成り行きである。結果として、柏木の父母である致仕の大臣や北の方には、柏木の死の悲しみを慰めるための遺児がいないため、先にいくつか挙げた場面のようになつただけ悲しみに暮れるしかないのである。ここで、一点押さえておきたいのは、葵の上が担つていた政治的役割がその子である夕霧に受け継がれたということである。だとするならば、遺児が実質いないとされる柏木が担つていた政治的役割を継ぐ者はいないということになる。致仕の大臣の権勢への志向は、こうした状況をうけてどう動くので

あろうか。そして、『源氏物語』中でも珍しい息子の死に對した致仕の大臣はどのように柏木を哀悼し、悲しみを慰めていくのであろうか。最後に、柏木を哀悼する致仕の大臣の姿を見ていきたい。

四、夕霧の慰問、致仕の大臣の悲しみの向かう先

『源氏物語』において、息子の死が描かれるのは柏木一例しかないといふが、それ以外に柏木の死で特徴的なことは、柏木の死を哀悼する人物の少なさと、哀悼する人物が父親であるといふ点である（注8）。柏木の死を哀悼する致仕の大臣の姿が書かれた場面をここからは見ていきたい。

夕霧は、生前柏木と深い親交があつたことから、柏木の妻である落葉の宮やその母の一条御息所、さらに柏木の父である致仕の大臣のもとを訪れ、故人とのありし日の思い出などを語り合つていた。これは、夕霧にとつての一つの死への向き合い方なのである。次の引用は、夕霧が致仕の大臣を訪ねた場面である。

「かう深き思ひは、そのおほかたの世のおぼえも、官位も思はず、ただことなることなかりしみづからのありさまのみこそ、たへがたく恋しかりけれ。何ばかりのことにてかは思ひさますべからむ」と、空を仰ぎてながめたまふ。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御畳紙に、

木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの衣着たる春
かな

大将の君、

亡き人も思はざりけむうちすてて夕のかすみ君着たれと
は
弁の君、
うらめしやかすみの衣たれ着よと春よりさきに花の散り
けむ

御わざなど、世の常ならずいかめしうなむありける。大将殿
の北の方をばさるものにて、殿は心ことに、誦経なども、あ
はれに深き心ばへを加へたまふ。
(柏木④三三五)

おおかたの悲しみとは違つて致仕の大臣の深い悲しみは、官位
などに関係なく、ただなつてことではない人物であつた柏木そのも
のだけが、恋しく思われるという。そして、どうすればこの悲し
みを忘れることができるのかと、空を見上げ物思いに沈んでいる。

致仕の大臣のこうした有り様は、先に確認した柏木生前の有り
様とは一変しているといえるのではないだろうか。柏木の生前に
おける致仕の大臣の悲しみは、「権大納言」という官位につきなが
らも、短い命を終えようとしている息子に対しての悲しみであり、
息子そのものを惜しむ気持ちだけとは考えづらい。しかし、この
場面に至つて、柏木生前とは違つた考え方が提示された。それは、
「官位」など関係なく、ただ格別どうということもなかつた息子
そのものだけが恋しく思われて悲しいというのである。柏木が亡
くなつてしまつた今となつては、官位などあつてもなくても変わ
らないのである。ただ最愛の息子を失つた悲しみだけが、致仕の
大臣の眼前に横たわつている。

致仕の大臣の悲しみに暮れる姿は、「空を仰ぎてながめたまふ」
(傍線部)と書かれていた。ここには引歌が指摘されている。

大空は恋しき人のかたみかは物思ことにながめらるらむ
(古今 卷十四 恋四 七四三 題しらず 酒井人真)

この歌は、大空は恋しい人の形見だろうか、そうともいえない
のに、どうして物思いするたびに大空を眺めて思いに耽つてい
るのだろう、という歌意である。『新編全集』は、ここに「前の「た
へがたく恋しかりけれ」とも照応し、あたかも恋の物思いのごと
く悲嘆にくれる」と注釈している(注9)。つまり引歌から考へ
ると、致仕の大臣の行動は恋人を想つて物思いに暮れる様子と重な
つていく。光源氏が葵の上の葬送から帰る場面で、「のぼりぬる煙
はそれと分かぬどもなべて雲居のあはれなるかな」(葵②四八)と、
葵の上の火葬の煙に事寄せて和歌を詠む直前にも「空のみながめ
られたまひて」(同四八)とあり、ことと同じく右の歌が引歌とし
て指摘されていた。ここで、光源氏は亡き妻である葵の上を思つ
て空を眺めており、恋人を想つて物思いに暮れる様子と合致する。
また致仕の大臣が和歌に詠み込み、その後の二人の和歌にも影響
している「かすみの衣」というあまり見馴れない歌語に注目する。
「かすみの衣」という歌語について、池田節子氏は『紫式部集』に
「一首、『出羽弁集』に二首あるのみだとし、「夫の服喪中に詠んだ
歌の言葉を用いて柏木を哀傷したところに、紫式部の深い思いを
読み取ることができよう」と述べる(注10)。池田氏の述べるよう
に「かすみの衣」という歌語と『紫式部集』との関連まで読み取
るならば、ここにも恋しい人を想う気持ちの現れを読み取ること
ができるかもしれない。では、なぜ致仕の大臣が柏木を想い物思

いに耽る様子が、恋しい人を想う姿に重なってくるのだろうか。

まず一つ考えられることは、致仕の大臣が官位など関係なく柏木そのものが恋しいと述べていたこととの関連である。致仕の大臣は「たへがたく恋しかりけれ」と、官位にとらわれず純粹に柏木その人の喪失を嘆く姿を見せた。そうした家や政治といったしがらみにとらわれない姿を、男と女という純粹に相手を想い合う姿に重ねることで強調したかったのかもしれない。

しかし、もう一つこの点を考えるにあたって押さえるべきは、先にも指摘した柏木への哀悼の少なさである。先に比較対象とした葵の場合、葵の上に対して詠まれた哀悼歌を数えてみると十四首ある（注11）。それに対して、柏木に対する哀悼歌は引用した致仕の大臣、夕霧、弁の君の三人が詠んだ三首のみである。單純に哀悼歌の量という観点で考えれば、明らかに柏木を哀悼する人物の少なさがうかがえる。そして、哀悼する人物について考えると、葵の上の哀悼をするのは、もちろん母である大宮も和歌を詠んでいるが、圧倒的に多いのは夫である光源氏の詠んだ和歌である。とするならば、柏木を哀悼する妻落葉の宮の和歌があつてしかるべきはずである。しかし、落葉の宮によって純粹に柏木を哀悼する和歌が詠まれることはない。本来ならば妻として夫柏木を哀悼すべきはずの落葉の宮は、柏木哀悼ではなく次なる夕霧との恋物語への流れへと巻き込まれてしまっているのである。語りはそうした妻からの哀悼の不在を埋めるかのように、致仕の大臣に恋しい人を想い物思いに耽る姿を重ねて語っていく。柏木の死を境にして、権勢家としての致仕の大臣の姿は隠れ、柏木を哀悼する姿が重ねて描かれていくのであつた。致仕の大臣の最後の登場場面が、紫の上の追悼の場面であることも興味深い。

五、おわりに

本稿では、致仕の大臣が柏木を哀悼する姿を追つていった。柏木は生前、致仕の大臣の期待を一身に背負う存在であつた。しかし、その期待も虚しく柏木はその短い生涯を終えた。柏木の死を悲しむ致仕の大臣や北の方の様子を押さえたうえで、同じように親に先立つて亡くなった人物である葵の上を取り上げ比較していった。柏木と葵の上は親に先立つて亡くなったことと、どちらも政治的な役割を担っていたという点では共通しているが、葵の上には遺児である夕霧がいる点では柏木と異なっていた。その違いは、悲しみを慰めるための形見の子がいらないということだけではなく、夕霧が葵の上の政治的役割を受け継いだように、子が親の政治的役割を引き継ぐ可能性があるという点で、将来を託す人物の不在を意味する。柏木を失つた致仕の大臣は、柏木の妻である落葉の宮からの哀悼を埋めるかのように、息子の死を哀悼する姿が恋しい人を想い物思いに耽る姿に重ねられる。ここに至って、致仕の大臣の権勢家としての姿は見えなくなり、ただ息子の死を嘆く姿ばかりが描かれていくこととなる。この点について、もう一つ気になる指摘を挙げておく。柏木巻後半から致仕の大臣にかつて使われていた「ををし」や「あざやか」という語が夕霧に使われるようになっていくことに関連して、津島知明氏は「ををし」「あざやか」に染め上げられる夕霧の姿は、そのままかつての内大臣の役割の終焉を物語るのだろうか」（注12）と述べる。致仕の大臣のかつての権勢家としての姿は、柏木巻での柏木の死を境にして、致仕の大臣から夕霧へと移り変わり、代わりに柏木の哀悼をする致仕の大臣の、一人の親としての姿が見えてくる。

※『源氏物語』の本文引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）により、（一）内に巻名・巻数・頁数を示した。傍線などの加工は吉井による。

注

（1）遺児が残されたのは、桐壺更衣が亡くなった時の光源氏であったり、葵の上が亡くなったときの夕霧などが挙げられる。また、容姿が似ている人物が代わりとなる例は、桐壺更衣に代わつての藤壺であったり、宇治十帖で語られる宇治の大君・中の君・浮舟であったりが挙げられるだろう。

（2）遺言に関する指摘は、長谷川政春「宇治十帖の世界——八宮の遺言の呪縛性——」（『中古文学研究叢書4 物語史の風景』若草書房、一九九七年）や、安藤亨子「遺言を残した人物たち」（『物語そして枕草子』おうふう、二〇〇二年）などを参照した。

（3）『角川古語大辞典』「権大納言」の項に、「官名。大納言の権官。宇多天皇の時、正官二人に対して一人置かれ、以後次第にふえた」とある。

（4）加藤昌嘉「源氏物語 夕霧巻の機構—致仕大臣一族と夕霧勢力圏—」（『古代中世文学論考4』二〇〇〇年）。

（5）『源氏物語』中に言が語られている人物としては、故大納言（桐壺更衣の父）、桐壺院、明石入道、八の宮、常陸守（空蟬の夫）、少式（玉鬘の乳母の夫）、六条御息所などが挙げられる。ほとんど全てが婚姻関係にあったり、親子関係にあったりする人物に対して残されている。六条御息所は光源氏に遺言を託してお

り、婚姻関係とも親子関係とも言えないが、御息所が以前に光源氏と関係をもっていたことや、光源氏以外に頼みになる人物がいけないことなどが要因であろう。いずれにせよ、友人間で遺言がなされる例は『源氏物語』には見られない。また、『源氏物語』に先行する『宇津保物語』でも、そうした例は見られなかった。

（6）池田節子「息子の死を悲しむ父—柏木と致仕の大臣—」（『日本文学』第六三巻一号、二〇一四年一月）には、「子の死を悲しむ親が描かれるのは、『源氏物語』の場合、桐壺更衣の母、葵の上の父母、柏木の父、浮舟の母である」とある。

子の死を悲しむ親の例の中に浮舟が入っているのは、浮舟は実際には死んではいないが、死の真相を知らない浮舟の母が娘の死を嘆いている場面が見られるため、一例として挙げている。

（7）吉井美弥子「葵の上の「政治性」とその意義」（上原作和編『人物で読む源氏物語 第五巻』、勉誠出版、二〇〇五年）。

（8）前掲注6 池田論文。

（9）阿部秋生ほか編『新編日本古典文学全集 源氏物語④』（小学館、一九九五年）の、三三五頁頭注一四。

（10）前掲注6 池田論文。

（11）倉田実「葵上追悼歌群についての覚書」（『明治大学日本文学』第九号、一九七九年九月）。

（12）津島知明「内大臣論—「きらきらし」の変奏曲—」（上原作和編『人物で読む源氏物語』一六巻、二〇〇六年）。

（よしい・なつみ／東京学芸大学大学院修士課程）